

るものなり。而して完全乳嘴蜂窠閉塞術後に來る錐體症狀は化膿性腦膜炎の續發を豫知するものなる故、其症候を確認し得るならば錐體部手術により救命する事を得。尙閉塞術に際しては完全搔爬を究極の目的とし之により再手術も又豫防し得るものなり。即ち現代耳外科學は完全乳嘴蜂窠閉塞術を基準として錐體尖端へ、或は迷路へと其の手術的體系を整へつゝあり。(小谷抄)

「チモフォージン」を應用したる咽喉結核の症例

山中幸造, 柳内恒久

耳鼻咽喉科, 12卷 11號, 961頁

結核症に對する特殊治療劑として創製せられたる「チモフォージン」の吸入及び靜注による効果は相當認められつゝあり。著者等は咽喉結核7例に局所粘膜下注射を試みしに何れも好成績にして、特に咽頭結核に於ては内科的に甚だ重篤なる場合に於ても著しき治癒効果を示せり。注射方法は咽頭結核には可撓性長針を用ひ、喉頭にはブリューニングス氏喉頭「スパーテル」及び特製長注射器を使用し、浸潤、潰瘍型共に周圍を取巻きて行ふ。注射液濃度は0.2%より始め副作用を考慮しつつ漸次10%位まで増加す。1回注射量は2.0cc以下とし、注射間隔は前注射の刺戟症狀消失せる時期にて大體7日位とす。治癒狀況は浸潤型にては注射後一時腫脹及弛緩性皰癢生ずるも次第に正常に復し、潰瘍型に於ては苔の消失後肉芽組織形成し瘢痕化する。發熱は割に考慮の要なきも咯血の危険なきものを適應とする。(渡部抄)

再歸熱再發株の研究 (XI)

第Ⅲ編 生體感染による觀察

Ⅲ 床蟲體内に於ける再發株の感染力並に其株特殊性の持續に就て

山下 朝橘

皮膚科紀要 33卷 2號 昭和14年2月

「マウス」を用ひて床蟲體内に於ける再發株の感染力並に其株特殊性の持續に關する實驗の結果次の結論を得た。

1、吸血後床蟲體内に生存せる再發株「スピロヘーテ」は35日間を經過するも尙其感染力を失はず。

2、吸血後床蟲體内に生存せる再發株「スピロヘーテ」は35日間を經過するも尙其の特殊性に變化を認めしめず。(桑原抄)

腸「チフス」免疫に關する實驗的研究(Ⅱ)

大江 乙彦

同誌

健康皮膚面より 1)種々の濃度の腸「チフス」菌「ワクチン」を種々の期間用ひて、「ワクチン」の濃度及び接種回数が抗體產生に如何なる影響を及ぼすか 2)腸「チフス」菌「ワクチン」を遠心沈澱して上清を採り之を用ひて其吸收狀態を考ひて其に 3)腸「チフス」菌「ラノリン」軟膏を用究し、更の吸收により幾許の抗體產生を認むるかを檢索せんとした。(桑原抄)

Brown-Pearce 系癌腫の酵素學的研究(Ⅳ)

Brown-Pearce 系癌腫家兎の腫瘍、並に肝腎及睪丸の「カタプシン」(自己蛋白分解)に就て

森 義一

同誌

片側睪丸に移植して得たる Brown-Pearce 系癌腫家兎を用ひ原發或は轉移腫瘍に於て腫瘍組織の老成變遷が腫瘍の自己蛋白分解性「カタプシン」作用に對し如何なる影響を與ふるや、且つ原發及轉移の各腫瘍「カタプシン」作用の相互の間に如何なる關係ありや、亦肝腎及び原發腫瘍母組織である睪丸等に於ける自己蛋白分解性「カタプシン」作用が癌腫増殖による全生體的變遷經過に並行して如何なる消長をなすや之等の疑問を解決せんとして酵素作用の消長を實驗的に檢索した。(桑原抄)

海濱再歸熱の實驗的研究(Ⅳ)

感染海濱に及ぼす免疫家兎血清の影響

(1)

小林 樞夫

同誌